

親鸞思想に基づく仏教「法学」論の研究序説(二)

— 親鸞における煩惱成就の論理 —

田中無量

要旨

親鸞の「煩惱具足の凡夫」は、あらゆる煩惱をそなえる凡夫のことである。従来、親鸞の「煩惱成就」(煩惱を成就する)も「煩惱具足」と同様に、煩惱が完全にそなわっているものと解釈された。しかし筆者は親鸞の全著作における様々な用語の使用例から、「煩惱成就の凡夫」とは「煩惱(の仏道)を成し遂げる凡夫」であり、「煩惱(即菩提)を無自性空と正しく了解する凡夫」であると考える。この「煩惱成就」の論理に、親鸞の人間論をも見出すことができる。「煩惱成就」(煩惱を成就する)は、大乘の正定聚に住し必ず滅度に至るものであるから、「無自性空」を「無」と曲解して、「煩惱」を肯定し、自己や社会や国家の思い通りにしてよいということでは決してない。かかる「煩惱」の肯定は、戦時教学に基づく法学論にも通ずるものである。凡夫が「煩惱」を無自性空と正しく了解する「煩惱成就」に、煩惱を生きる人間の仏道が「成就」といえよう。

キーワード 凡夫 人間論 煩惱成就 煩惱具足 大江淳誠

序論

筆者は、拙稿「親鸞思想に基づく仏教「法学」論の研究序説(一)」¹から「法学」を研究することを目的に、親鸞の説く「煩惱」の二面性について明らかにした。この親鸞思想に基づく仏教「法学」論の先行研究には、法学者の小野清一郎²、平川宗信³を挙げることができる。しかしすでに拙稿に論じたように⁴、かかる仏教「法学」(真宗「法学」)の研究は、法学分野に限らず、仏教学では応用仏教学、真宗学では実践真宗学の範疇にあり、仏教学、真宗学の研究分野といえる。筆者は真宗学、仏教学の立場から、親鸞思想に基づく仏教「法学」論の研究を試みたい。

さて前述の拙稿においては、親鸞が「一切善悪凡夫人」と述べ、あらゆる人間を凡夫であると示し、さらに「煩惱成就の凡夫」⁵、「煩惱具足の凡夫」⁶と語り、凡夫を「煩惱」と関連付けて語ることから、親鸞における「煩惱」を論じ、親鸞には煩惱理解に二側面があることを指摘した。その二側面とは、「断煩惱」(生死流転・退転)と「不断煩惱」(即菩提・即涅槃・救済)の側面である。拙稿では、親鸞思想に基づく仏教「法学」論の序説としての意味合いから、その研究意義を示す必要がある、紙幅の都合上、「煩惱」に関する文言は一部のみを示すに留めた。当稿では、親鸞著作の全文献を示して、親鸞における「煩惱」について明かしていく。先の拙稿においては、「煩惱成就」と「煩惱具足」の文言にも注目し、親鸞が「煩惱成就」と語る場合は、「不断煩惱」の側面のみが語られているのに対し、「煩惱具足」と語る場合は、主に「断煩惱」の側面が示されているが、「不断煩惱」の側面にも一部使用されることがあることを指摘している。さらにその理由は、煩惱を具足する身である凡夫は、「煩惱の成就(完成)」(煩惱を成就すること)

において煩惱の無自性（即菩提、即涅槃）を証知されるが故に、「煩惱成就」においては「即菩提」、「即涅槃」が語られていくのであろうと推察している。

多くの先行研究では親鸞の「煩惱成就」と「煩惱具足」の相違について注目せず、「煩惱成就の凡夫」も「煩惱具足の凡夫」も、「あらゆる煩惱をのこらず完全に具えている」¹²、「あらゆる煩惱をそなわえている」¹¹凡夫と解釈され、両者ともに「あらゆる煩惱をそなえる」凡夫という意味の理解に留まっている。¹³しかし筆者は、「煩惱成就」と「煩惱具足」の意味は相違するものと考ええる。¹⁴結論を先にすれば「煩惱具足」の意味は「あらゆる煩惱がそなわっている」という意味であるが、「煩惱成就」はその意味のみではない。現漢文で「煩惱具足」と「具足煩惱」とがあり、両者は「煩惱を具足する」と読まざるを得ないが、「煩惱成就」は「煩惱を成就する」「煩惱が成就する」の読みが可能である。¹⁵筆者はこのうち「煩惱を成就する」という意味で理解し、「煩惱成就の凡夫」とは「煩惱を成就する凡夫」と解する。この「煩惱を成就する」とについて、「消滅すべき煩惱」を消滅することができ、「成就した」つまり「成し遂げた」と考えると、親鸞は、煩惱を断つべきであるにもかかわらず、煩惱を断つことのできない凡夫に対し、「煩惱成就」と示したことになり、違和感が生じるといふ指摘もある。¹⁶しかし筆者は、「煩惱成就」（煩惱を成就する、達成する、完成する）¹⁷とは「煩惱の真実（無自性空）を成し遂げる（正しく了解する）」という意味であり、ここにいう「煩惱」とは「断煩惱」としての「煩惱」ではなく「煩惱即菩提」「生死即涅槃」の「煩惱」を成就するという意味であり、そこに救済の成立があると考える。このことを明らかにするために、当稿では引文も含め親鸞の全著作から、親鸞の説く「煩惱」を「断煩惱」の側面と「不断煩惱」の側面とに分類し、「煩惱成就」と「煩惱具足」の相違

を明確にしていく。次に、親鸞の「凡夫」における二側面を考察し、最後に「具足」と「成就」の使用について、仏・菩薩とそれ以外（衆生・凡夫）とに分類することで、「具足」と「成就」を考察していく。かかる方法により、親鸞の「煩惱具足」（煩惱を具足する）と「煩惱成就」（煩惱を成就する）の相違を示し、親鸞における「煩惱成就」の論理を明らかにしたい。なお、親鸞の著作において仏・菩薩は阿弥陀仏・法蔵菩薩を指すことが多いが、本論文では仏・菩薩（阿弥陀仏・法蔵菩薩・諸仏・諸菩薩）とそれ以外（凡夫・衆生など）を分類し、「煩惱成就」の意味を明かすことに主眼が置かれるため、阿弥陀仏・法蔵菩薩も、仏・菩薩の中に入れて論じることがある。

一 親鸞における「煩惱」の二側面

親鸞は、「煩惱」について二側面を語る。一つは「断煩惱」（生死流転・退転）の側面と、もう一つは「不断煩惱」（即菩提・即涅槃・不退転・救済・無自性空）²⁰の側面である。これら二つの側面は決して別ものではなく、「煩惱」の二側面、二面性を語るものと考えられる。

この親鸞における「煩惱」の二側面に関連して、大江淳誠と村上速水の先行研究を挙げておきたい。大江は、親鸞が『教行信証』『信卷』末に『涅槃経』を引用することは罪業無自性を示すものであると述べ、罪業無自性の義は衆生の体の無自性を表すものであり、「真仏土巻」において『涅槃経』を引用することもこの意を示すものであると指摘する。そして大江は、古来真宗内の学轍の中において皆有仏性の義を怖れ、あるいはこれを真宗の他力回向義を阻害するとなすものがあるが、この理解は真宗教義の合理的根拠を失うものであるとも指摘する。また煩惱転じて菩提となることの所以は、感智一体の理に基づくものであつ

て、諸有皆空無所有の通仏教の思想を根底とするものとも述べる。さらに『教行信証』の理論には二面があり、一には衆生と仏とを相対し機法の関係を立て、如来の力用が衆生の上に動いて転迷開悟せしめつつあることを示し、二には衆生と仏と共に一如の根底に立つことを示すものであることを明かす。そして初めの義は諸法假有の上に立つて迷悟染浄の界畔に依って示し、後の義は皆空無相の上より表すものであると論じた上で、このことは、龍樹以下所謂真宗伝統の七祖および親鸞の著すところは、いずれも仏教哲学の理論をその基盤とするものであると断じている。²¹ また大江は、衆生について空假の両義をもって解釈されることが曇鸞に始まり、道綽、善導、源信とも共通するものであることを指摘し、「空無所有の故に体空なり、しかも業感の別あるが故に假名相中に迷悟を生ずとなすことは、相承の列祖中にいう所であって、この衆生に対する両面の解釈が真宗の救済論の枢軸をなすのである。」²³とも述べる。

次に村上は、親鸞が『教行信証』「信巻」に『涅槃経』の皆有仏性の義を引用する意について、諸法の空無自性なることを表すものであり、衆生の中に仏性があるという意味ではなく、仏性中に衆生があるという方が適切であろうと述べている。そして仏と衆生とは無自性空を共通の基盤とするから煩惱が転じて菩提となり、生死を全うじて涅槃となり得るのであって、もし煩惱に固定した自性があるならば、煩惱について菩提に転ずることは不可能であると指摘する。また、迷悟差別の宛然たるところに救済の悲願が起る引由があり、生仏ひとしく無自性空であるところに凡夫もついに仏果に至ることを得る理由があるのであって、この両義相俟って他力救済の意義が成ずるとも述べる。そして他力廻向が実践され、他力救済が可能となるためには、生仏一如にして無自性である義が許されるべきであって、生仏異質なりとすれば衆生の成仏は不可能といわなければならない、とも指摘している。²⁵

筆者はこの大江、村上の両説を踏まえ、親鸞における煩惱の二側面について、以下に「断煩惱」（生死流転・退転）と「不断煩惱」（即菩提・即涅槃・救済・無自性空・不退転）の二種に分類してみたい。親鸞の全著作を網羅し、最初に「断煩惱」の側面、次に「不断煩惱」の箇所を挙げていく。「断煩惱」の側面のうち、いくつかに◎の印を付した。◎は筆者によるものだが、この◎印の文言は阿弥陀如来の力用により「断煩惱」から「不断煩惱」の側面へと開導せられることを示す文言である。この分類により、「煩惱成就」（煩惱を成就する）と「煩惱具足」（煩惱を具足する）の相違も明確にしたい。

まずは主著となる『教行信証』についてまとめてみたい。親鸞は『教行信証』において、引文も含め「煩惱」を百二十箇所示し、そのうち「断煩惱」の側面に該当するものは約九十箇所、「不断煩惱」の側面に該当する箇所は、約三十箇所である。「行巻」、「証巻」、「真仏土巻」、「化身土巻」にそれぞれ語られているのでまとめたい。当稿では『浄土真宗聖典（註釈版）』を使用し、「煩惱成就」と「煩惱具足」に関する部分は傍線を付すことにし、傍線部は引用者による。基本的には一行を引用し、見極めが難しい文言の場合は前後の文言も合わせて引用している。最初に「断煩惱」の箇所を挙げたい。その文は以下の通りである。

「行巻」

もし人、菩提心のなかに念仏三昧を行ずれば、一切の煩惱、一切の諸障、ことごとくみな断滅すと。（大行釈・一六一頁）

自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして三界に流転して火宅を出でずと信知す。（大行釈・一八八頁。傍線は筆者による。以下同）

- 善見薬王のごとし、よく一切煩惱の病を破するがゆゑに。(一乗海積・二〇〇頁)
- なほ大水のごとし、よく一切煩惱の垢を滌ぐがゆゑに。(一乗海積・二〇一頁)
- ◎ 煩惱の林に遊んで神通を現じ、生死の園に入りて応化を示すといへり。(正信偈・二〇五頁。◎印は筆者による。以下同)
- ◎ われまたかの撰取のなかにあれども、煩惱、眼を障へて見たてまつらずといへども、大悲、倦きことなくしてつねにわれを照らしたまふといへり。(正信偈・二〇七頁)
- 「信巻」
- 〈十方におのおの恒河沙等の諸仏しまして、同じく釈迦よく五濁悪時・悪世界・悪衆生・悪見・悪煩惱・悪邪・無信の盛りなるときにおいて、弥陀の名号を指讃して衆生を勸励せしめて、称念すればかならず往生を得と讃じたまふ〉(大信積・二二〇頁)
- ◎ 随ひて一門を出づるは、すなはち一煩惱の門を出づるなり。(大信積・二二二頁)
- 〈中間の白道四五寸〉といふは、すなはち衆生の貪瞋煩惱のなかに、よく清淨願往生の心を生ぜしむるに喩ふ。(大信積・二二五頁)
- 自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして三界に流転して火宅を出でずと信知す。(大信積・二二八頁)
- ◎ またいはく(往生要集・中)、「われまたかの撰取のなかにあれども、煩惱、眼を障へて見たてまつるにあたはずといへども、大悲、倦きことなくして、つねにわが身を照らしたまふ」と。(三二一問答・二二九頁)
- ◎ 如来の至心をもつて、諸有の一切煩惱悪業邪智の群生海に回施

- したまへり。(三二問答・二三二頁)
- ◎ しかるに微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海に漂没して、真実の回向心なし、清淨の回向心なし。このゆゑに如来、一切苦悩の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまひしとき、(中略)利他真実の欲生心をもつて諸有海に回施したまへり。(三二問答・二四一頁)
- ◎ また『論』(論註・下)には、く、「出第五門とは、大慈悲をもつて一切苦悩の衆生を觀察して、応化の身を示して、生死の園、煩惱の林のなかに回入して、神通に遊戲し教化地に至る。(三一問答・二四三頁)
- 黒はすなはちこれ無明煩惱の黒業、二乗・人・天の雑善なり。(三一問答・二四四頁)
- ◎ すでに煩惱を離れて、よく衆生三毒の利箭を抜く。(明所被機・二七〇頁)
- 《阿闍世》とはすなはちこれ煩惱等を具足せるものなり。(明所被機・二七八頁)
- 仏性を生ぜざるをもつてのゆゑに、すなはち煩惱の怨生ず。被機・二七八頁)
- 煩惱の怨生ずるがゆゑに、仏性を見ざるなり。(明所被機・二七八頁)
- 煩惱を生ぜざるをもつてのゆゑに、すなはち仏性を見る。仏性を見るをもつてのゆゑに、すなはち大般涅槃に安住することを得。(明所被機・二七八頁)
- ◎ ここをもつて仏の得たまふところの功德を見たてまつり、衆生の煩惱悪心を破壊せしむ」と。(明所被機・二八七頁)
- ◎ また願はくはもろもろの衆生、永くもろもろの煩惱を破し、

了々に仏性を見ることが、なほ妙徳のごとくして等しからん」と。

(明所被機・二八九頁)

かの罪を造る人は、みづから妄想の心に依止し、煩惱虚妄の果報の衆生によりて生ず。(明所被機・三〇〇頁)²⁶

「証卷」

◎ 生死の園、煩惱の林のなかに回入して、神通に遊戯して教化地に至る。(還相回向釈・三三三頁)

◎ 仏地の功德は習氣・煩惱の垢まします。 (還相回向釈・三一九頁)

◎ これは凡夫、煩惱の泥のなかにありて、菩薩のために開導せられて、よく仏の正覚の華を生ずるに喩ふ。(還相回向釈・三一九頁)

◎ たとへば出家の聖人は、煩惱の賊を殺すをもつてのゆゑに名づけて比丘とす。(還相回向釈・三三四頁)

◎ 「巧方便」とは、いはく、菩薩願ずらく、〈おのれが智慧の火をもつて一切衆生の煩惱の草木を焼かんと、もし一衆生として成仏せざることあらば、われ仏にならじ〉と。(還相回向釈・三二六頁)

「真仏土卷」

一切衆生は、つねに無量の煩惱のために覆はれて、慧眼なきがゆゑに、見ることを得ることあたはず。(真仏土釈・三四五頁)

煩惱の身、無常の身にあらざるがゆゑに大楽と名づく。(真仏土釈・三四六頁)

またのたまはく(涅槃経・徳王品)、「善男子、諸仏如来は煩惱起らず、これを涅槃と名づく。(真仏土釈・三四八頁)」²⁷

一切衆生はことごとく仏性あれども、煩惱覆へるがゆゑに見ること

を得ることあたはずと。(真仏土釈・三五五頁)²⁸

世尊、このもろもろの煩惱断は、いはゆる須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支仏道は、もろもろの煩惱の習を断ず。(真仏土釈・三六七頁)

惑染の衆生、ここにして性を見ることがあたはず、煩惱に覆はるるがゆゑに。(真仏土結釈・三七一頁)

「方便化身土卷」

◎ しかるに今の時の衆生、ことごとく煩惱のために繫縛せられて、いまだ悪道生死等の苦を勉れず。縁に随ひて行を起して、一切の善根つぶさにすみやかに回して、阿弥陀仏国に往生せんと願ぜん。(観経隠顕・三八八〜三八九頁)

貪瞋諸見の煩惱来り間断するがゆゑに、慚愧・懺悔の心あることなきがゆゑに。(観経隠顕・三八九頁)

一時に煩惱百たび千たび問はる。(観経隠顕・三九〇頁)

◎ 次下の文には、十方におのおの恒河沙等の諸仏ましまして、同じく釈迦を讃めたまはく、〈よく五濁悪時・悪世界・悪衆生・悪煩惱・悪邪・無信の盛んなるときにおいて、弥陀の名号を指讃して衆生を勧励して称念せしむれば、かならず往生を得〉と。

(真門釈・四〇二頁)

黒闇生死海を行じて、解脱を得といへども、煩惱を離するは、この人還りて悪果報を受く。(真門釈・四〇八頁)

かくのごとき漸次に劫尽き、もろもろの天人尽き、一切の善業白法尽滅して、大悪もろもろの煩惱濁を増長せん。(外教釈・四四二頁)

かくのごとき次第に劫尽き、もろもろの天人尽き、白法また尽きて、大悪もろもろの煩惱濁を増長せん。(外教釈・四四二頁)

了知清浄土よ、かくのごとき次第に、いま劫濁・煩惱濁・衆生濁・大悪煩惱濁・鬪諍悪世の時、人寿百歳に至りて、一切の白法尽き、一切の諸悪闇翳ならん。(外教釈・四四三頁)

世間はたとへば海水の一味にして大鹹なるがごとし、大煩惱の味はひ世に遍満せん。集会の悪党、手に鬪鬪を執り、血をその掌に塗らん、ともにあひ殺害せん。(外教釈・四四三頁)

源信、『止観』によりていはく(往生要集・中)、「魔は煩惱によりて菩提を妨ぐるなり。鬼は病患を起し命根を奪ふ」(意)と。

(後序・四七一頁)

右に示した箇所によると、「煩惱」は「貪瞋煩惱」であり、「無明」であり、「悪業」であり、「悪果報」を齎すものである。「煩惱」は断すべきものであり、「断煩惱」において「解脱」が語られる。また傍線に示したように、「煩惱具足」(煩惱を具足する)はこの側面に該当するものが多く語られるが、「煩惱成就」(煩惱を成就する)については該当するものが一切ない。そして◎箇所にあるように、阿弥陀如来の悲引により、煩惱は「悪道生死等の苦を勉れず」「悪果報を受く」といういわゆる業報思想²⁹に基づく「断煩惱」の側面から、「不断煩惱」(即菩提・無自性空・救済)の側面へと開導せられることが語られるのである³⁰。

続いて『教行信証』における「不断煩惱」(即菩提、即涅槃)の側面を列挙していきたい。かかる箇所には、「住正定聚」、「必至滅度」が説かれており、まさしく救済論であると考えられよう。その文は以下の通りである。

「行巻」

『経』に説きて「煩惱の水解けて功德の水と成る」とのたまへるが(ごとし)。(一乗海積・一九七頁)

よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。

(正信偈・二〇三頁)

「信巻」

菩提心不可壊の法葉を得れば、一切の煩惱、諸魔怨敵、壊することあたはざるところなり。(大信釈・二二八頁)

菩提の心もまたまたかくのごとし。無量劫において生死のなか、もろもろの煩惱の業に処するに、断滅することあたはず、また損減なし。(大信釈・二二九頁)

信はよく永く煩惱の本を滅す。(三一問答・二三八頁)

「証巻」

しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即のときに大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る。(真実証・三〇七頁)

凡夫人の煩惱成就せるありて、またかの浄土に生ずることを得れば、三界の繋業、畢竟して牽かず。(真実証・三一頁)

すなはちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得。いづくんぞ思議すべきや」と。(真実証・三一頁)

「真仏土巻」

また因果と名づく、また煩惱と名づく、また解脱と名づく、(真仏土積・三五三頁)

凡夫人、煩惱成就せるありて、またかの浄土に生ずることを得るに、三界の繋業畢竟して牽かず。(真仏土積・三五八頁)

すなはちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得。いづくんぞ思議すべきや」と。(真仏土積・三五八頁)

一切の法はみなこれ化なり。この法のなかにおいて(中略)諸仏の法の変化あり、煩惱の法の変化あり、(真仏土積・三六六頁)

右に示した箇所によると、煩惱は変化するものであり(無自性)、煩惱の本(実体・本質)を滅すという「信心」、あるいは浄土に生ずること³¹において、煩惱を断ぜずして涅槃を得るものであることが語られ、それにより「正定聚」に住し、必ず「滅度」に至ることが説かれる。そしてここに「煩惱成就」(煩惱を成就する)も語られているが、その一方で「煩惱具足」(煩惱を具足する)は該当するものがない。つまり親鸞の名著『教行信証』においては、「煩惱具足」(煩惱を具足する)は「断煩惱」(生死流転)の煩惱の側面、「煩惱成就」(煩惱を成就する)は「不断煩惱」(即菩提、即涅槃)の煩惱の側面とに分類して著述されているといえよう。

次に、『教行信証』以外の著作についても示しておきたい。まずは以下に「断煩惱」の側面を列举したい。

『浄土文類聚鈔』

◎ 大慈大悲の弘誓、廣大難思の利益、いまし煩惱の稠林に入りて諸有を開導し、すなはち普賢の徳に遵ひて群生を悲引す。(三法列釈・四八三頁)

◎ 蓮華藏世界に至ることを得れば、すなはち寂滅平等身を証せしむ。煩惱の林に遊びて神通を現じ、生死の園に入りて応化を示すと。(念仏正信偈・四八七頁)

◎ また「中間の白道」といふは、すなはち、貪瞋煩惱のなかによく清浄願往生の心を生ぜしむるに喩ふ。(問答分・四九三頁)

『愚禿鈔』

六悪とは、一には悪時、二には悪世界、三には悪衆生、四には悪見、五には悪煩惱、六には悪邪無信盛時なり。(下・深心釈・五二七頁)

◎ 一つには、「随ひて二門を出づるは、すなはち一煩惱門を出づ

るなり」(散善義) (下・回向発願心釈・五三三頁)

『入出二門偈』

◎ かの土に生れをはりて、すみやかに疾く奢摩他・毘婆舍那、巧方便力成就することを得をはりて、生死の園・煩惱の林に入りて、応化身を示し、神通に遊ぶ、教化地に至りて群生を利せしむ。(五四八頁)

◎ これは凡夫、煩惱の泥のうちにありて、仏の正覚の華を生ずるに喩ふるなり。これは如来の本弘誓不可思議力を示す。(五四九頁)

『尊号真像銘文』

煩惱具足の衆生は、もとより真実の心なし、清浄の心なし、濁悪邪見のゆゑなり。(本・六四三頁)

◎ 「無碍」といふはさることなしとなり、さはることなしと申すは、衆生の煩惱悪業にさへられざるなり。(本・六五二頁)

◎ 「我亦在彼撰取之中 煩惱障眼雖不能見 大悲無倦常照我身」(往生要集・中) 文「我亦在彼撰取之中」といふは、われまたかの撰取のなかにありとのたまへるなり。「煩惱障眼」といふは、われら煩惱にまなこさへらるとなり。(末・六六二頁)

「雖不能見」といふは、煩惱のまなこにて仏をみたまつることあたはずといへどもといふなり。(末・六六二頁)

『一念多念文意』

◎ 楞嚴院の源信和尚のたまはく、「我亦在彼撰取之中 煩惱障眼雖不能見大悲無倦常照我身」(往生要集・中)と。この文のころは、「われまたかの撰取のなかにあれども、煩惱まなこをさへて、みたまつるにあたはずといへども、大悲ものうきことなくして、つねにわが身を照らしたまふ」とのたまへるなり。(六八四頁)

◎ 無碍と申すは、煩惱悪業にさへられず、やぶられぬをいふなり。(六九〇頁)

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとへにあらはれたり。(六九三頁)

◎ 「知」といふはしるといふ、煩惱悪業の衆生をみちびきたまふとするなり。(六九四頁)

『唯信鈔文意』

具縛はよろづの煩惱にしばられたるわれらなり、煩は身をわづらはす、悩はころをなやますといふ。(七〇七〜七〇八頁)

「内」はうちといふ、ころのうちに煩惱を具せるゆゑに虚なり、仮なり。(七一五頁)

『弥陀如来名号徳』

◎ 有情の煩惱悪業のころにさへられずましますによりて、無碍光仏と申すなり。(七二八頁)

◎ 無碍光と申すゆゑは、十方一切有情の悪業煩惱のころにさへられずへだてなきゆゑに、無碍とは申すなり。(七三〇頁)

『御消息』

煩惱具足の身なればとて、ころにまかせて、身にもすまじきことをもゆるし、口にもいふまじきことをもゆるし、ころにもおもふまじきことをもゆるして、いかにもころのままにてあるべしと申しあうて候ふらんこそ、かへすがへす不便におぼえ候へ。(七三九頁)

◎ はじめて仏のちかひをききはじむるひとびとの、わが身のわろくころのわろきをおもひしりて、この身のやうにてはなんぞ往生

せんずるといふひとこそ、煩惱具足したる身なれば、わがころの善悪をば沙汰せず、迎へたまふぞとは申し候へ。(七四〇頁)

貪欲の煩惱にくるはされて欲もおこり、瞋恚の煩惱にくるはされてねたむべくもなき因果をやぶるころもおこり、愚痴の煩惱にまどはされておもふまじきことなどもおこるにてこそ候へ。(七四四頁)

しかれば、わが身のわるければ、いかでか如来迎へたまはんとおもふべからず、凡夫はもとより煩惱具足したるゆゑに、わるきものとおもふべし。(七四七頁)

◎ このゆゑに、よきあしき人をきらはず、煩惱のころをえらばず、へだてずして、往生はかならずするなりとするべしとなり。(七四七頁)

◎ つぎに、念仏させたまふひとびとのこと、弥陀の御ちかひは煩惱具足のひとのためなりと信ぜられ候ふは、めでたきやうなり。(七七八頁)

おほかたは、煩惱具足の身にて、ころをもとどめがたく候ひながら、往生を疑はずせんとおぼしめすべしとこそ、師も善知識も申すことにて候ふに、かかるわるき身なれば、ひがごとをことさらに好みて、念仏のひとびとのさはりとなり、(七八七〜七八八頁)

ただ無明なることおほはるる煩惱ばかりとなり。(七九七頁)

煩惱にくるはされて、おもはざるほかにすまじきことをもふるまひ、いふまじきことをもいひ、おもふまじきことをもおもふにてこそあれ。さはらぬことなればとて、ひとのためにはらぐるく、すまじきことをもし、いふまじきことをもいはば、煩惱にくるはされたる儀にはあらで、わざとすまじきことをもせば、かへすがへすあるまじきことなり。(八〇二頁)

右の箇所を示した通り、『教行信証』以外の書物も『教行信証』と同様に、「断煩惱」（生死流転）の側面の「煩惱」が多く語られる。この「煩惱」は、貪欲・瞋恚・愚痴、無明であり、悪業である。真実心も清浄心もない。この「生死流転」の側面の煩惱により、怒り、妬み、嫉む心などは臨終の一念まで続いていくことが説かれる。そしてその「断煩惱」「生死流転」の側面の煩惱から「不断煩惱」の側面へと開導していくのが阿弥陀如来の悲願・悲引・大慈大悲の弘誓なのである。阿弥陀如来の大悲・悲引により、貪瞋煩惱のなかによく清浄願往生の心を生ぜしむことで、凡夫は「不断煩惱」の側面へと開導せられていくのである。³⁰

また『教行信証』同様、「煩惱具足」（煩惱を具足する）について述べられているが、「煩惱成就」（煩惱を成就する）に関しては該当する箇所が一切ない。すなわち親鸞の全著作のうち、「煩惱成就」（煩惱を成就する）について該当するものは、全て「不断煩惱」（即菩提、即涅槃）の側面といえる。

続いて『教行信証』以外の「不断煩惱」（即菩提、即涅槃）の側面を列挙したい。

『浄土文類聚鈔』

聖言、あきらかに知んぬ。煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相の心行を獲ればすなはち大乘正定の聚に住す。正定聚に住すればかならず滅度に至る。（三法列釈・四八二頁）

煩惱成就の凡夫人、信心開發すればすなはち忍を獲、生死すなはち涅槃なりと証知す。（念仏正信偈・四八七〜四八八頁）

常没の凡夫人、願力の回向によりて真実の功德を聞き、無上の信心を獲れば、すなはち大慶喜を得て、不退転地を獲るなり。煩惱を断ぜしめずして、すみやかに大涅槃を証すとなり。（結嘆・四九七頁）

『入出二門偈』

煩惱成就せる凡夫人、煩惱を断ぜずして涅槃を得、すなはちこれ安樂自然の徳なり。（五四九頁）

煩惱を具足せる凡夫人、仏願力によりて信を獲得す。（中略）安樂土に到れば、かならず自然に、すなはち法性の常樂を証せしむるとたまへり。（五五〇頁）

『三経往生文類』

凡夫人の煩惱成就せるあつて、またかの浄土に生を得るに、三界の繋業畢竟じて牽かず。（六二九頁）

すなはちこれ煩惱を断ぜずして涅槃の分を得。（六二九頁）

『尊号真像銘文』

能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃（末・六七〇頁）

「不断煩惱得涅槃」といふは、「不断煩惱」は煩惱をたちすてずしてといふ、「得涅槃」と申すは、無上大涅槃をさとするをうるとしるべし。（末・六七二頁）

『唯信鈔文意』

ひとすちに具縛の凡愚・屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。（七〇七頁）

『弥陀如来名号徳』

また煩惱を具足せるわれら、無碍光仏の御ちかひをふたごころなく信ずるゆゑに、無量光明土にいたるなり。（七三一頁）

『御消息』

しかれば、「無明煩惱を具して安養浄土に往生すれば、かならずすなはち無上仏果にいたる」と、釈迦如来説きたまへり。（七四七頁）

また如来とひとしいふは、煩惱成就の凡夫、仏の心光に照らされ
 まらせて信心歓喜す。信心歓喜するゆゑに正定聚の数に住す。
 (七六五頁)

また他力と申すは、仏智不思議にて候ふるときに、煩惱具足の凡
 夫の無上覚のさとりを得候ふなることをば、仏と仏のみ御はからひ
 なり、(七七六〜七七七頁)

右に示した箇所から、『教行信証』と同様、「信心」、あるいは浄土
 に生ずることにおいて、生死即涅槃であり、煩惱を断せずして涅槃を得
 るものであることが明かされ、「正定聚」に住し必ず「滅度」に至るこ
 とが説かれる。そして『教行信証』と同様に、「煩惱成就」(煩惱を成
 就する)はこの箇所該当するものがある。それに対し『教行信証』と
 異なり、「煩惱具足」(煩惱を具足する)についても、該当する箇所が
 散見される。

最後に『三帖和讃』について述べたい。「和讃」に関しては和語を
 もって讃歎する詩であるため、「煩惱」に対する文言が非常に短く、判
 別することが難しい部分もあるが、親鸞の他の著作も踏まえるならば、
 一応次のように分類できよう。まず「断煩惱」の側面を列挙したい。

『高僧和讃』

◎ 煩惱にまなこさへられて 撰取の光明みざれども 大悲ものう
 きことなくて つねにわが身をてらすなり (源信讃・五九五頁)

『正像末和讃』

無明煩惱しげくして 塵数のごとく遍満す 愛憎違順することは
 高峰岳山にことならず (三時讃・六〇一頁)

次に「不断煩惱」の側面を明かしたい。以下の通りとなろう。

『高僧和讃』

釈迦の教法おほけれど 天親菩薩はねんごろに 煩惱成就のわれら

には 弥陀の弘誓をすすめしむ (天親讃・五八〇頁)
 本願力にあひぬれば むなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海みち
 みちて 煩惱の濁水へだてなし (天親讃・五八〇頁)

本願円頓一乗は 逆悪撰すと信知して 煩惱・菩提体無二と すみ
 やかにとくさとらしむ (曇鸞讃・五八四頁)

論主の一心ととけるをば 曇鸞大師のみことには 煩惱成就のわれ
 らが 他力の信とのべたまふ (曇鸞讃・五八四頁)

無碍光の利益より 威徳広大の信をえて かならず煩惱のこほりと
 け すなはち菩提のみづとなる (曇鸞讃・五八四頁)

尽十方無碍光の 大悲大願の海水に 煩惱の衆流帰しぬれば 智慧
 のうしほに一味なり (曇鸞讃・五八五頁)

煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば すなはち穢身すてはてて
 法性常樂証せしむ (善導讃・五九一頁)³³

『正像末和讃』

弥陀の智願海水に 他力の信水いりぬれば 眞実報土のならひにて
 煩惱菩提一味なり (三時讃・六〇四頁)

以上、本節では親鸞の全著作から「煩惱」について、「断煩惱」と
 「不断煩惱」の二側面に分類を試み、「煩惱具足」(煩惱を具足する)

と「煩惱成就」(煩惱を成就する)がどの内容に表れるかを明かした。

まず『教行信証』においては「煩惱具足」と「煩惱成就」は、明確に
 「断煩惱」の側面と「不断煩惱」の側面とに分けられている。他の著作
 においては「煩惱成就」に関しては「不断煩惱」の側面に限定されるも
 のの、「煩惱具足」については「断煩惱」の側面にも「不断煩惱」の側
 面にも語られている。

右を踏まえ、一に示したことをまとめておきたい。「煩惱具足」(煩
 悩を具足する)の凡夫は、「断煩惱」の側面においては無明であり、悪

業とされ、生死流転し、救済は語られていない。しかし阿弥陀如来の本願力、悲引により、凡夫の煩惱は「断煩惱」から「不断煩惱」の側面へと開導せられ、信心を開発し、浄土往生がなされていく。そして、「煩惱成就」(煩惱を成就する)の凡夫となる「不断煩惱」の側面において生死即涅槃、住不退転が語られ、必ず滅度に至るという救済が語られることになる。凡夫は「煩惱成就」(煩惱を成就する)においても、「煩惱」をそなえている「煩惱具足」(煩惱を具足する)であることに変わりはないので、「煩惱具足」に関しては「断煩惱」の側面だけではなく、「不断煩惱」の側面においても使用されているといえよう。

二 親鸞における「凡夫」の二側面

次に、親鸞における凡夫について、「罪悪生死」(実の生死・流転輪廻)の側面と「不断煩惱」(得涅槃、煩惱即菩提、生死即涅槃、無自性空)の二側面が説かれることを明かしたい。親鸞の著作中、「凡夫」については引文も含め百か所あり、そのうち「罪悪生死」の側面が約八〇箇所、「不断煩惱」の側面が約二〇箇所ある。ゆえに多くが「罪悪生死」の凡夫について説かれたものであり、内容もほぼ同様であるので、当稿では全ては引用せずに一部の引用に留めたい。まずは『教行信証』の「生死流転」の側面について以下に示したい。

「行巻」

凡夫道は究竟して涅槃に至ることあたはず、つねに生死に往来す。

これを凡夫道と名づく。(大行釈・一四七頁)

〈衆生無生にして虚空のごとし〉と説くに二種あり。一つには、凡夫の実の衆生と謂ふところのごとく、凡夫の所見の実の生死のごとし。(大行釈・一五七頁)

いはゆる凡夫、人・天の諸善、人・天の果報、もしは因もしは果、みなこれ顛倒す、みなこれ虚偽なり。(大行釈・一五八頁)
現にこれ生死の凡夫、罪障深重にして六道に輪廻せり。(大行釈・一六六頁)

◎ 一切善惡の凡夫、生ずることを得るは、みな阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁とせざるはなし」と。(大行釈・一六八頁)

◎ 善惡の凡夫、回心し起行して、ことごとく往生を得しめんと欲す。(大行釈・一六九頁)

自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして三界に流転して火宅を出でずと信知す。(行一念釈・一八八頁)

「信巻」

つには、決定して深く、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して、出離の縁あることなしと信ず。(大信釈・二一八頁)

自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして三界に流転して火宅を出でずと信知す。(大信釈・二二八頁)

◎ 凡夫は実と謂へり、諸仏世尊はそれ真にあらずと知ろしめせり。(明所被機・二八四～二八五頁、七箇所)

「証巻」

◎ 一切善惡の凡夫、生ずることを得るは、みな阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁とせざることなしとなり。(真実証・三一―頁)

◎ これは凡夫、煩惱の泥のなかにありて、菩薩のために開導せられて、よく仏の正覺の華を生ずるに喩ふ。(還相回向釈・三一九頁)

「真仏土巻」

一切凡夫の業は、不清浄のゆゑに涅槃なし。(真仏土釈・三四七

頁)

『教行信証』においては、右の箇所を含め、「罪悪生死」（流転輪廻）の側面の凡夫に該当する箇所は、全部で約六〇箇所ある。³⁴これらにおいて「煩惱具足」は語られるが、「煩惱成就」は語られていない。特に「罪悪生死」の凡夫、「善悪」の凡夫と示され、生と死、善と悪などを分別し、「罪悪」とも語られる業報思想の中で、「実の衆生」「実の生死」「もしは因、もしは果、みなこれ顛倒す」という、因果を実体的に把握する凡夫が語られる。³⁵したがってこの「罪悪生死」の凡夫は、善因業果、悪因苦果という輪廻を出離することができず、生死に往来し、涅槃に至ることができない凡夫道を歩んでいくことになる。しかし◎印の文言にあるように、阿弥陀如来の大願業力により開導せられ、六道輪廻を脱し往生が得しめられるとも明かされる。³⁶

続いて、『教行信証』において「不断煩惱」（生死即涅槃、煩惱即菩提・無自性空）の凡夫について説かれる箇所を列挙したい。ここに該当し得るものは管見の限り、四箇所のみである。

「行巻」

惑染の凡夫、信心発すれば、生死すなはち涅槃なりと証知せしむ。

(正信偈・二〇六頁)

「証巻」

しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即のときに大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る。(真実証・三〇七頁)

凡夫人の煩惱成就せるありて、またかの浄土に生ずることを得れば、三界の繫業、畢竟して牽かず。すなはちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得。(真実証・三一二頁)

「真仏土巻」

凡夫人、煩惱成就せるありて、またかの浄土に生ずることを得るに、三界の繫業畢竟して牽かず。すなはちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得。(真仏土・三五八頁)

右の四か所のうち三か所において、「煩惱成就」（煩惱を成就する）の凡夫と示されており、浄土に生ずること、あるいは信心（生死即涅槃と証知せしむ）を獲ること（出離の縁）によって「不断煩惱」（煩惱即菩提、生死即涅槃）の側面の凡夫が語られる。³⁷

次に、『教行信証』以外の他の著作についても指摘しておきたい。まずは、凡夫の「罪悪生死」（流転輪廻）の側面を示していく。かかる『教行信証』以外の著作においても『教行信証』と同様に、凡夫の「罪悪生死」（流転輪廻）の側面を説くものが多く、内容もほぼ同様であるので、該当の文については以下に一部列挙したい。

『浄土文類聚鈔』

しかるに、流転輪廻の凡夫、曠劫多生の群生、清浄の回向の心なし、また真実の回向の心なし。(問答分・四九二頁)

『愚禿鈔』

薄地の凡夫、業惑に纏縛せられて五道に流転せること百千万劫なり。(上・引証成義・五一五頁)

『愚禿鈔』

一つには、決定してへ自身は、現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねに没しつねに流転して、出離の縁あることなし」と深信す。(下・深心積・五二二頁)

『一念多念文意』

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと

(六九三頁)

『唯信鈔文意』

◎ しかれば大小の聖人・善悪の凡夫、みなともに自力の智慧をもつては大涅槃にいたることなければ、無碍光仏の御かたちは、智慧のひかりにてましますゆゑに、この仏の智願海にすすめ入れたまふなり。(七〇〇頁)

『唯信鈔文意』

◎ 自力のころをすつといふは、やうやうさまさまの大小の聖人・善悪の凡夫の、みづからが身をよしとおもふころをすて、身をたのまず、あしきころをかへりみず、ひとすぢに具縛の凡愚・屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、广大智慧の名号を信衆すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。(七〇七。傍線部は善悪の凡夫、波線部は「煩惱具足」にいう「煩惱」が「不断煩惱」(生死即涅槃)の側面に使用される例。)

『御消息』

凡夫はもとより煩惱具足したるゆゑに、わるきものとおもふべし。またわがころよければ往生すべしとおもふべからず、自力の御はからひにては真実の報土へ生るべからざるなり。(四七四頁)

右の文言も含め、約二〇箇所が「罪悪生死」(流転)の側面の凡夫に該当するとみられる。「薄地」「流転輪廻」「善悪」の凡夫は、業惑に繫縛せられ流転し続けることになり、ここに救済(極果・大涅槃)は語られない。しかし、阿弥陀如来の本願(仏の智願海、智慧のひかり)が出離の縁となり、救済(無上大涅槃、極果)へといたる事が説かれる。またすでに論じた通り、右の『御消息』に「罪悪生死」の側面の凡夫に「煩惱具足」の凡夫が該当しているが、「煩惱成就」の凡夫に該当するものはない。

続いて、『教行信証』以外の著作における「不断煩惱」(生死即涅槃、煩惱即菩提・無自性空)の凡夫について説かれる箇所を列挙したい。

『浄土文類聚鈔』

煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相の心行を獲ればすなはち大乘正定の聚に住す。正定聚に住すればかならず滅度に至る。(三法列釈・四八二頁)

煩惱成就の凡夫人、信心開發すればすなはち忍を獲、生死すなはち涅槃なりと証知す。(念仏正信偈・四八七頁)

凡夫の即生を示すを、大悲の宗致とすとすなり。(結嘆・四九七頁)

常没の凡夫人、願力の回向によりて真実の功德を聞き、無上の信心を獲れば、すなはち大慶喜を得て、不退転地を獲るなり。煩惱を断ぜしめずして、すみやかに大涅槃を証すとすなり。(結嘆・四九七頁)

頁)

『二門偈』

煩惱成就せる凡夫人、煩惱を断ぜずして涅槃を得、すなはちこれ安樂自然の徳なり。(中略)これは凡夫、煩惱の泥のうちにありて、

仏の正覚の華を生ずるに喩ふるなり。(五四九頁)

煩惱を具足せる凡夫人、仏願力によりて信を獲得す。(中略)この

信は妙好上人なり。安樂土に到れば、かならず自然に、すなはち

法性の常樂を証せしむとのたまへり。(五五〇頁)

『三経往生文類』

『三経往生文類』

凡夫人の煩惱成就せるあつて、またかの浄土に生を得るに、三界の繫業畢竟して牽かず。すなはちこれ煩惱を断ぜずして涅槃の分を得。(広・六二九頁)

『一念多念文意』

『一念多念文意』

諸仏出世の直説、如来成道の素懷は、凡夫は弥陀の本願を念ぜしめ

て即生するをむねとすべしとなり。(六九三頁)
 『三帖和讃』

経道滅尽ときいたり 如来出世の本意なる 弘願真宗にあひぬれば
 凡夫念じてさとるなり(『高僧和讃』善導讃・五九〇頁)

弥陀智願の広海に 凡夫善悪の心水も 婦入しぬればすなはちに
 大悲心とぞ転ずなる(『正像末和讃』三時讃・六〇七頁)

『御消息』

われらは信心決定の凡夫、位(は) 正定聚の位なり。これは因位なり、これ等覚の分なり。(七六四頁)

また如来とひとしといふは、煩惱成就の凡夫、仏の心光に照らされ
 まゐらせて信心歡喜す。信心歡喜するゆゑに正定聚の数に住す。

(七六五頁)

また他力と申すは、仏智不思議にて候ふるときに、煩惱具足の凡
 夫の無上覚のさとりを得候ふなることをば、仏と仏のみ御はからひ
 なり、さらに行者のはからひにあらず候ふ。(七七六〜七七七頁)

右の十四箇所の凡夫が「不断煩惱」(生死即涅槃)の側面に該当する
 ものである。かかる箇所では親鸞は、『教行信証』と同様、浄土に生ずる
 こと、または仏願力により信心を獲ること(出離の縁)によって「不断
 煩惱」(煩惱即菩提、生死即涅槃、証知せしむ)の側面の凡夫を説いて
 いる。それ以外にも、「弥陀の本願」を念せしめて即生すること、「念
 じてさとる」ことも示されている。また凡夫において「不断煩惱」(生
 死即涅槃)の側面が語られる場合、「煩惱成就」(煩惱を成就する)と
 語られるだけでなく、「煩惱具足」(煩惱を具足する)も説かれてい
 る。かかる「煩惱具足」の説示があることは、『教行信証』の場合と異
 なる部分である。

いずれにせよ、親鸞の全著作中、「煩惱成就」は「生死流転」の側面

の凡夫には語られず、「不断煩惱」(煩惱即菩提、生死即涅槃)の凡夫
 のみである。それに対し、「煩惱具足」の凡夫は、「生死流転」にも
 「不断煩惱」の側面にも共通して示される。これらのことから「煩惱具
 足」(煩惱を具足する、煩惱をそなえる) 凡夫については従来の解釈と
 同様に、あらゆる煩惱を十分にそなえたものであるが、「煩惱成就」
 (煩惱を成就する、煩惱を成し遂げる)の凡夫についてはその「煩惱」
 の全てが「煩惱即菩提」の「煩惱」であるので、「煩惱」の真実に目覚
 めた凡夫、あるいは「煩惱」を無自性空と正しく了解する凡夫(例えば
 親鸞は信心ある人について「等正覚」³⁹⁾、「便同弥勒」⁴⁰⁾、「如来とひとし」⁴¹⁾
 と語る)を指すのではないかと推察するのである。それを確かめるため
 に、次節において「成就」(成し遂げる)と「具足」(そなえる)の使
 用について、仏・菩薩とそれ以外に分類してみたい。

三 親鸞における「具足」と「成就」の使用例と相違

本節では親鸞における「具足」(そなえる)と「成就」(成し遂げ
 る)の使用とその相違を考えたい。これを確かめるために、親鸞の全著
 作中、「成就」と「具足」について、仏・菩薩と仏・菩薩以外のどちら
 に使用されるかを明かしていく。まずは「成就」(成し遂げる)につい
 てみていきたい。

「成就」は親鸞の全著作中一五四度、用いられている。そのうち約
 一四〇箇所は仏・菩薩について用いられている(仏・菩薩以外の者が
 「成就せず」という文は二か所ある)⁴²⁾。まずは「成就」について、『教
 行信証』の中で仏・菩薩に使用される例を示したい。『教行信証』には
 引文も含めおおよそ九〇箇所該当するが、内容的に共通する部分が多い
 のでここではその一部を示すに留めたい。次の通りである。

「行巻」

願(第十七願)成就の文、『経』(大経・下)にのたまはく、「十方恒沙の諸仏如来、みなともに無量寿仏の威神功德不可思議なるを讚嘆したまふ」と。(大行釈・一四二頁)

「菩薩は四種の門に入りて自利の行成就したまへりと、知るべし。

(大行釈・一五四頁)

『無量寿如来会』(上)にいはく、〈広くかくのごとき大弘誓願を發して、みなすでに成就したまへり。〉(大行釈・一七五頁)

「信巻」

如来、清浄の真心をもつて、円融無碍不可思議不可称不可説の至徳を成就したまへり。(三二問答・至心釈・二二二頁)

「証巻」

もしは往、もしは還、みな衆生を抜いて生死海を度せんがためなり。このゆゑに、〈回向を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに〉(還相回向釈・三二三頁)

「真仏土巻」

力願あひ符うて、畢竟して差はず。ゆゑに成就といふ」と。(真仏土・三六一頁)

選択本願の正因によりて、真仏土を成就せり。(真假対弁・三七二頁)

「方便化身土巻」

「清浄業処」といふは、すなはちこれ本願成就の報土なり。(観経隠顯・三八二頁)

親鸞が仏・菩薩に使用した「成就」の例として、右の文はその一部である。⁴³これらは、阿弥陀仏・法蔵菩薩の本願成就に関する文がほとんど全てである。また「成就」の定義に関する文もこの例に該当する。それ

は以下の文であり、「行巻」の『論註』引文である。

〈菩薩は四種の門に入りて、自利の行成就したまへりと、知るべし〉と。〈成就〉とは、いはく自利満足せるなり。〈応知〉といふは、いはく自利によるがゆゑにすなはちよく利他す。これ自利にあらずしてよく利他するにはあらざるなりと知るべし。

〈菩薩は第五門に出でて回向利益他の行成就したまへりと、知るべし〉と。〈成就〉とは、いはく回向の因をもつて教化地の果を証す。もしは因もしは果、一事として利他にあたはざることあることなきなり。〈応知〉といふは、いはく利他によるがゆゑにすなはちよく自利す、これ利他にあたはざらずしてよく自利するにはあらざるなりと知るべし。(行・他力釈・一九〇〜一九一頁)

いふところの〈不虚作住持〉は、本法蔵菩薩の四十八願と、今日の阿弥陀如来の自在神力とによりてなり。願もつて力を成ず、力もつて願に就く。(中略)力願あひ符うて畢竟して差はず。ゆゑに成就といふ」と。(行・一乗海釈・一九八頁)

ここにいう「成就」は「成就したまへり」とあることから、法蔵菩薩に関するものであるが、親鸞の全著作中、「成就」のみの定義に関する文は、おそらくこの箇所のみとなる。かかる箇所では「成就」は、法蔵菩薩の自利利他(自利即利他)を満足するものであり、利他回向の因によって一切衆生を教化する果を成し遂げさせ、因も果も一切衆生を済度する利他でないものはない、と説く。そして阿弥陀如来の本願の因(誓願)も本願成就の果(仏力)も究極には等しくなるので、「成就」というと明かしている。つまり「成就」とは法蔵菩薩の自利利他を満足し阿弥陀如来の本願を満たすものであるから、法蔵菩薩の自利即利他の仏道は成し遂げられ、ここに凡夫の救済(仏道)も成し遂げられていくことになる。

続いて、「成就」について仏・菩薩以外において説かれているものを列挙する。「煩惱成就」はすでに列挙したのでそれ以外の該当箇所を全て、引文も含め非常に少ないが示しておきたい。

『教行信証』

「即」の言は願力を聞くによりて報土の真因決定する時剋の極促を光闡するなり。「必」の言は審なり、然なり、分極なり、金剛心成就の貌なり。(行・六字釈・一七〇頁)

まさしく無病にしてすべてよく来れるに値へり。まさしく七日の功成就するに値へり。(行・大行釈・一七三頁)

大小の戒体、遠くまた清浄なることを得しめ、念仏三昧を得しめ、菩薩の諸波羅蜜を成就せんと欲はば、まさにこの法を学すべし。

(行・大行釈・一八一頁)

〈不動〉とは、いふところは、かの天・人、大乘根を成就して傾動すべからざるなり」と。(行・一乗海釈・一九八頁)

もしよく広大の善を修集すれば、かの人、大因力を成就す。もし人、大因力を成就すれば、すなはち殊勝決定の解を得。(信・法義

釈・二二九頁)

その他、「煩惱成就」に関するものはすでに示した通り三箇所あり、さらに、成就しがたき者として仏・菩薩以外が語られる箇所が前述の二箇所あり、合計一〇箇所である。そのため、仏・菩薩以外について「成就」が用いられるのは、事実上八箇所のみであり、そのうち三箇所が「煩惱成就」となる。また御自釈のみで考えていくと、「煩惱成就」以外には、「必定」の「必」の釈となる「金剛心成就の貌なり。」の一所のみである。ここに示されている「成就」は全て、ある仏道(金剛心、波羅蜜、大乘根、大因力)を「成し遂げる」として理解できよう。これを「煩惱成就」に結びつけていくならば、「煩惱成就」の凡夫と

は、「煩惱(という仏道)を成し遂げる」凡夫と解釈できよう。⁴⁴

続いて『教行信証』以外の書物をみていきたい。約五〇箇所ある。

『教行信証』以外の書物においては、「煩惱成就」(煩惱へという仏道)を成し遂げる)の使用以外で、「成就」が仏・菩薩以外に使用される例は、引文も含め皆無である。つまり「煩惱成就」(煩惱の仏道を成し遂げる)のみ、仏・菩薩以外、すなわち「凡夫」にも「成就」が使用される。そこで『教行信証』以外の書物に関しては、仏・菩薩の「成就」の用例のみを、その一部だが以下に列挙してみたい。

『浄土文類聚鈔』

願(第十七・十八願)成就の文、『経』(大経・下)にのたまはく、「十方恒沙の諸仏如来、みなともに無量寿仏の威神功德、不可思議にましますことを讃嘆したまふ。(三法列釈・四七八)

しかれば、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまふところにあらざることあることなし。(三法列

釈・四八二頁)

『入出二門偈』

二種の不思議力まします、これは安楽の至徳を示すなり。一つには業力、いはく法蔵の大願業力に成就せられたり。(五四五頁)

本願力の回向をもつてのゆゑに、利他の行成就したまへりと、知るべし。(五四八頁)

『浄土和讃』

諸仏の護念証誠は 悲願成就のゆゑなれば 金剛心をえんひとは 弥陀の 大恩報ずべし (『浄土和讃』弥陀経讃・五七一頁)

願力成就の報土には 自力の心行いたらねば 大小聖人みなながら 如来の弘誓に乗ずなり (『高僧和讃』善導讃・五九一頁)

如来の作願をたづぬれば 苦悩の有情をすてずして 回向を首とし

たまひて 大悲心をば成就せり(『正像末和讃』三時讃・六〇六頁)

『三経往生文類』

称名・信樂の悲願(第十七・十八願)成就の文、『経』(大経・下)にのたまはく、「十方恒沙の諸仏如来、みなともに無量寿仏の威神功德、不可思議なるを讃嘆したまふ。(六二五頁) 必至滅度・証大涅槃の願(第十一願)成就の文、『大経』(下)にのたまはく、「それ衆生あつてかの国に生れんもの、みなことごとく正定の聚に住せん。(六二七頁)

『唯信鈔文意』

おほよそ十方世界にあまねくひろまることは、法蔵菩薩の四十八大願のなかに、第十七の願に、「十方無量の諸仏にわがなをほめられん、となへられん」と誓ひたまへる、一乘大智海の誓願成就したまへるによりてなり。(七〇三頁)

『御消息』

第十八の本願成就のゆゑに阿弥陀如来とならせたまひて、不可思議の利益きはまりましますまぬ御かたちを、天親菩薩は尽十方無碍光如来とあらはしたまへり。(七四七頁)

また願成就の文(大経・下)に、「十方恒沙の諸仏」と仰せられて候ふは、信心の人とこころえて候ふ。(七七八頁)

右に示した通り、「成就」の使用は、『教行信証』同様に、阿弥陀仏・法蔵菩薩の本願成就に関する文がほとんどである。また仏・菩薩以外の文については七箇所みられるが、それらは全てすでに示した「煩惱成就」(煩惱へという仏道)を成就する)の凡夫として使用されているもののみである。

次に「具足」(そなえる)についてみていきたい。「具足」は親鸞の

全著作中、七一箇所用いられる。「成就」と異なり、「具足」は主に仏・菩薩以外に用いられている。まずは『教行信証』における仏・菩薩以外の「具足」を一部列挙したい。

「行巻」

一切の人、法を説くを聞かば、みなことごとくわが国に來生せん。わが願ずるところみな具足せん。(大行釈・一四五頁)

またいはく(同・下)、「『大経の讃』(讃阿弥陀仏偈)にいはく、(もし阿弥陀の徳号を聞きて歡喜讃仰し、心帰依すれば、一念に至るまで大利を得。すなはち功德の宝を具足すとす。(大行釈・一六二頁)

「信巻」

もしつねに波羅蜜を修習すれば、すなはちよく摩訶衍を具足せん。もしよく摩訶衍を具足すれば、すなはちよく法のごとく仏を供養せん。(三一問答・法義釈・二四〇頁)

「証巻」

すでに三業具足したまへるを知んぬ、人・天の大師となつて化を受くるに堪へたるひとは、これたれぞと知るべし。(還相回向釈・三一七〜三一八頁)

「真仏土巻」

衆生、未來に莊嚴清淨の身を具足して、仏性を見ることを得ん。

(真仏土・三四八頁)

また『経』(涅槃経・迦葉品)には「衆生未來に清淨の身を具足し莊嚴して、仏性を見ることを得」とのたまへり。(真仏土結釈・三七一頁)

「方便化身土巻」

韋提はすなはちこれ女人の相、貪瞋具足の凡夫の位なり(觀経隱

顯・三九一頁)

かくのごときの人、また信ありといへども、推求にあたはざる、このゆゑに名づけて信不具足とす。(真門釈・四〇七頁)

右の文だけでなく、『教行信証』には、引文も含め「具足」は四九箇所あり、そのうちの約三五箇所が仏・菩薩以外に使用されている。それは基本的に、一切の衆生、凡夫に用いられており、すでに示した通り、「煩惱具足」(あらゆる煩惱をそなえる)の凡夫も三箇所に語られる。

続いて『教行信証』において「具足」が仏・菩薩に用いられている例を列挙したい。以下の文である。

この願を発しをはりて、実のごとく安住して、種々の功德具足して、威徳広大清浄の仏土を莊嚴したまへり」と。(行・大行釈・一七五頁)

大莊嚴をもつて衆行を具足して、もろもろの衆生をして功德成就せしむとのたまへり」と。(信・三一問答・至心釈・二三三頁)

種種の功德具足して、威徳広大清浄仏土を莊嚴せり。(同右)

なにもつてのゆゑに、信心をもつてのゆゑに、菩薩摩訶薩はすなはちよく檀波羅蜜乃至般若波羅蜜を具足せり。(信・三一問答・至心釈・二三六頁)

如来世尊は無量の功德を成就し具足したまひて、なほ壞することあたはず。

(信・妙所被機・二九五頁)

またのたまはく(涅槃経・迦葉品)、「善男子、如来は知諸根力を具足したまへり。(真仏土・真仏土釈・三五〇頁)

迦葉菩薩、仏にまうしてまうさく、(世尊、如来はこの知根力を具足したまへり。(同右・三五二頁)

右の文などおよそ一〇箇所に見られるが、それらは全て引文である。

また「功德」や「莊嚴」を具足すると示され、衆生救済の力用が語られる部分ともいえよう。『教行信証』全体を通じて、「具足」(そなえる)が仏・菩薩に使用されるのは一部の引文に限られており、多くは仏・菩薩以外に使用されている。

続いて『教行信証』以外における「具足」についても述べたい。まずは仏・菩薩以外に使用される箇所を列挙してみたい。

『浄土文類聚鈔』

仏、弥勒に語りたまはく、(それかの仏の名号を聞くことを得ることありて、歡喜踊躍し乃至一念せん。まさに知るべし、この人は大利を得とす。すなはちこれ無上の功德を具足す(三法列釈・四七八〜四七九頁)

『愚禿鈔』

また雑の散行について、三福あり。一には、孝養父母・奉事師長・慈心不殺・修十善業なり。二には、受持三帰・具足衆戒・不犯威儀なり。(下・深心釈・五三二頁)

『浄土和讃』

阿弥陀仏の御名をきき 歡喜讚仰せしむれば 功德の宝を具足して 一念大利無上なり(讚阿弥陀仏偈和讃・五六一頁)

『一念多念文意』

「当知此人」といふは、信心のひとをあらはす御のりなり。「為得大利」といふは、無上涅槃をさとのゆゑに、「則是具足無上功德」とものたまへるなり。(六八五頁)

『唯信鈔文意』

「浄戒」は大小乗のもろもろの戒行、五戒・八戒・十善戒、小乗の具足衆戒、三千の威儀、六万の齋行、『梵網』の五十八戒、大乘一心金剛法戒、三聚浄戒、大乘の具足戒等、すべて道俗の戒品、これ

らをたもつを「持」といふ。(七〇六頁)

『弥陀如来名号徳』

かの土に生れんとねがふ信者には、不可称不可説不可思議の徳を具足す。(七三二頁)

その他すでに示した通り、「煩惱具足」の凡夫も十一箇所に語られ、仏・菩薩以外で使用される回数は約二〇箇所である。

最後に『教行信証』以外の書物において、「具足」が仏・菩薩に使用される箇所を列挙したい。これは以下の二箇所しかない。

『浄土文類聚鈔』

清浄微妙無辺の刹、廣大莊嚴等具足せり。(念仏正信偈・四八五頁)

大莊嚴をもつて衆行を具足し、もろもろの衆生をして功德成就せし

めたまふ(問答分・四九一頁)

両文ともに『浄土文類聚鈔』の文であり、仏の莊嚴の「具足」(そなえる)に使用されている。

本節に示した通り、親鸞において「成就」(〈仏道を〉成し遂げる)は主に仏・菩薩に使用される。仏・菩薩以外に使用される例は引文を除くと極めて少なく、その中で凡夫は「煩惱成就」(煩惱への仏道)を成し遂げる)が採用される。また「具足」(そなえる)については主に仏・菩薩以外に使用され、仏・菩薩の場合にも使用される(その場合のほとんどは引文である)。つまり「具足」(そなえる)に関してはどこらにも通底するものであるといえる。

小結

従来、親鸞の「煩惱成就」は、煩惱が完全にそなわっているものと理

解されてきた。しかし親鸞における「煩惱成就」は、全て「不断煩惱」(即菩提、生死即涅槃)の側面の「煩惱」のみが語られている。仮にこの「煩惱成就」を(実体的な)あらゆる煩惱が完全にそなわる)と解釈するのならば、この「煩惱」は「断滅」して「涅槃」を得るべきものとなり「不断煩惱」の側面の「煩惱」となってしまう。その場合、その後続く文の「不断煩惱」の側面との整合性が取り難く、解釈に苦しむこととなる。しかし親鸞の様々な使用例から筆者は「煩惱成就」を「煩惱への仏道」を成し遂げる)と理解する。そして「煩惱成就の凡夫」とは「煩惱への仏道」を成就する凡夫)であり、「煩惱への仏道」を成し遂げる凡夫)、すなわち「煩惱(不断煩惱の側面の〈煩惱〉)を無自性空と正しく了解する(成し遂げる)凡夫)であると解釈する。そして「煩惱具足の凡夫」は従来の研究通り、「煩惱を具足する(そなえる)凡夫)であり、「あらゆる煩惱をそなえる凡夫)のことである。かかる理解により、「煩惱成就」の凡夫にせよ、あらゆる煩惱をそなえる「煩惱具足」の凡夫であることに変わりないが故に、「煩惱具足」は「不断煩惱」の側面の「煩惱」にも「不断煩惱」の側面の「煩惱」にも、どちらにも共通して語られていると考えられる。⁴⁵

このように「煩惱成就」(煩惱への仏道)を成し遂げる)を、「煩惱」を無自性空と正しく了解するという意味に解釈すれば、その後の繋がりも容易になってくる。「煩惱成就」とは、「煩惱即菩提」「生死即涅槃」の「煩惱」、すなわち「煩惱」の無自性空に目覚めることであるから、即菩提、生死即涅槃が成立し、さらに法蔵菩薩の仏道の「成就」(自利利他)という衆生救済の論理もまた成し遂げられていく。そして「煩惱具足」は「不断煩惱」の側面にも「不断煩惱」の側面にも使用され、両側面を通底する概念ともなっている。「具足」は「罪惡生死」の凡夫と「不断煩惱」の仏・菩薩を繋ぐ基盤ともなり、「煩惱」の無自性

空（縁起・化）⁴⁷を示すものともいえよう。

かかる親鸞の「煩惱成就」の論理によれば、我々は「善悪（善と悪に分別する）」の凡夫であり、「煩惱具足」（実体的な煩惱をそなえる）の凡夫、実の凡夫（全て実体視する凡夫）である。「煩惱具足」である以上、臨終の一念に至るまで、身を煩わせ心を悩ます実体的な煩惱は止まらず、消えず、絶えることはない。阿弥陀如来の悲引により、「罪惡生死」（流転輪廻、実）の凡夫から「煩惱成就」（煩惱への仏道）を成就する、煩惱即菩提、無自性）の凡夫へと開導せられたとしても、三業に繫縛せられる「煩惱」自体が実体的に消滅するわけではない。我々はいくまで「煩惱具足」の身である。実体的に消滅すると考える場合の「煩惱」は「断煩惱」の「煩惱」であり、「生死流転」し続ける。しかし「煩惱成就」（煩惱の仏道を成就する）へと開導せられた凡夫は、「煩惱」自体が無自性空（縁起・化）と領解されていくので、「煩惱を断せずして涅槃を得」ることになり、「大乘正定の聚に住」し、「かならず滅度に至る」ことになると考えられる。つまり「煩惱成就」とは、凡夫が「煩惱（の仏道）」を成し遂げていくことを示す言葉であり、親鸞は「煩惱成就」について多くを語らないが、親鸞の様々な使用例から考えれば、実は、凡夫が「煩惱」を無自性空（煩惱即菩提、生死即涅槃）と正しく了解していく仏道（「煩惱成就」の凡夫道）こそ、阿弥陀如来の本願力の「成就」であることを暗に語っているともいえよう。

かかる親鸞の「煩惱成就」（煩惱を成就する）の論理に、親鸞の人間論をも見出すことができる。親鸞にいう「煩惱成就」とは、大乘の正定聚に住し、必ず滅度に至るものであるから、「煩惱即菩提」「生死即涅槃」の「煩惱」は「煩惱」を肯定し、煩惱のままに自己や社会や国家の都合の良いことばかりを求めるのではない。⁴⁹「煩惱具足」の身を常に省みつつ、人間の抱えるあらゆる「煩惱」を「無自性空と正しく了解す

る」（成就する）ことで己の「煩惱」を超克して生きていく人間論である。「煩惱具足」のわが身は、「煩惱」を実体視する可能性があり、あらゆるものを分別し比較して悩み苦しみ、業報思想に捉われ、無論、生死の四苦を解決することなどできない。しかし阿弥陀如来の本願力の「成就」により、凡夫が「煩惱」を「成就」することで、「煩惱」自体が無自性空であると気付かされ、証知せられ、あらゆる存在は無我・縁起であり、有的に比較・分別することから離れていく。自他一如であり、生きとし生けるもの全てが尊い存在である。「煩惱成就」において、あらゆる存在は無自性空・無我・縁起であるが故に、「煩惱・生死」即「菩提・涅槃」であることが、まさしく阿弥陀如来の悲引・本願力により証知せられる。そこに「煩惱成就」の「即菩提」「即涅槃」という「煩惱」を超克する人間の救済が語られると考えられよう。再度述べるが、「煩惱成就」（煩惱を成し遂げる）であるからといって、仏道を誤り、「無自性空」を「無」と曲解し「煩惱」を肯定し、自己や社会や国家の思い通りにしてよいということでは決してない。⁵⁰ともすれば、親鸞は非常に珍しい言葉でもある「煩惱成就」について語りたかったものの、それを強調しなかったのは誤解が生じる恐れを回避したかったのかもしれない。「煩惱」の肯定は、拙稿に示した小野清一郎の戦時教学に基づく法学論にも通ずるものであり、それでは欲望・煩惱のままに生きる人間へと進んでいくことになり、「大乘正定聚」に住し涅槃に至ることは到底できない。阿弥陀如来の本願力により凡夫は「煩惱成就」（煩惱の仏道を成し遂げる）へと開導せられるとはいえず、臨終の一念に至るまで、常に「煩惱具足」（あらゆる煩惱をそなえる）のわが身であることに変わりはない。凡夫が「煩惱」を無自性空と正しく了解するところに、まさしく「煩惱成就」は成立し、無明長夜の闇は破され、煩惱を生きる人間の仏道が「成就」といえよう。

- 1 『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』第三七号、二〇二二年
- 2 今村仁司は、「親鸞を哲学者(智慧を求めめる人)として、厳密に受け止める必要がある」とし、「彼の著作『教行信証』を学的組織の言説、哲学的テキストとして定義」する。そのうえで『教行信証』の化身土巻に注目し、親鸞思想に基づく法哲学を論考している。(同『親鸞と学的精神』岩村書店、二〇〇九年、二一、一四八―一五九頁)
- 3 同『日本法理の自覚的展開』(有斐閣、一九四二年)、同『歎異抄講話』(大法輪閣、一九四七年)等
- 4 同『憲法的刑法学の展開―仏教思想を基盤として』(有斐閣、二〇一四年)等
- 5 前註一
- 6 西義雄は、応用仏教学の基礎学とその分野を明かすために、その第一の立場に、仏教における文献学的、歴史学的研究を仏教研究の基礎学と見たうえで、倫理学、法律学、経済学、心理学、民俗学、社会学等々の立場からこれに関連する仏教の研究を応用学の分野と見る立場を挙げる(同『應用佛教學の基盤とその分野―死せる佛陀觀と活ける佛陀觀を視點として―』(『印仏研』一五(二)、六〇二―六一三頁、一九六七年)。
- 7 池本重臣は、真宗学とは「宗祖の根本的立場を出発点として、宗祖の教義を教理史の立場より考察して本質を見出し、其に現代的価値を与える学問」(同『親鸞教学の教理史的研究』永田文昌堂、一九六九年、二九三頁)と定義しており、筆者の提示する親鸞思想に基づく仏教「法学」論の研究、いわば真宗「法学」研究は、池本の定義する「真宗学」に合致すると考えている。
- 8 『教行信証』「正信偈」『註釈版聖典』二〇四頁
- 9 『教行信証』「証卷」同右三〇七頁
- 10 『御消息』同右七七六頁
- 11 「煩惱成就」に関する先行研究は、玉木興慈「煩惱成就と不断煩惱得涅槃」(『真宗学』一一八号、二〇一三年)に詳しくまとめられている。
- 12 星野元豊『講解教行信証―証の巻・真仏土の巻』一九九四年、法蔵館、一一四―一三頁
- 13 『真宗新辞典』では「煩惱成就の凡夫」と「煩惱具足の凡夫」が同義として理解され、これが現在の大方の理解であると考えられる。親鸞の著作の英訳を参照しても両者を道義として扱っている。また本願寺派の学僧の興隆(一七五九―一八四二)も「有凡人煩惱成就は、具縛の凡夫の煩惱具足を指す。成就は、具足円満の義なり」とあり、煩惱成就と煩惱具足を同義としている。(玉木興慈前掲論文)
- 14 親鸞における「煩惱具足」と「煩惱成就」が異なる意義を持つとする説は、小妻道生を挙げることができる。(小妻道生「煩惱成就」『高田短期大学紀要』第三号、一九八五年)
- 15 玉木興慈前掲論文
- 16 玉木興慈前掲論文
- 17 小妻道生は、親鸞が「成就」の語を使うとき、それは「達成すること、完成すること、十分に果たされること」という意味と、更に「願や目的の達成されること」という意味において、主に使われていたことから、「成就」という語が行信の果としての証の意義をもつと推察している。(小妻前掲論文)
- 18 玉木は、親鸞の著作には、成就の語は多く用いられており、達成すべきことがらを成し遂げた時に、成就と表わされている、と指摘する。(玉木興慈前掲論文)
- 19 杉岡孝紀は、「親鸞は経・論・釈を語に依らず義によって読み変え、解釈していくのであるから、したがって、『教行証文類』は文類形式をとりながらも、引文を含め全文が親鸞自身の文であり、親鸞の思想であると見ることができ」と述べている。(同『親鸞の解釈と方法』法蔵館、二〇一一年、七六頁)
- 20 江戸宗学においては、本願寺派学僧の道振(一七七三―一八二四)が無自性仏性説を展開している。
- 21 同『教行信証と仏教思想』百華苑、一九四九年、二八―三二頁
- 22 同『真宗の本願論』永田文昌堂、一九六三年、五六―六三頁
- 23 同『真宗の本願論』六三頁
- 24 村上速水『親鸞教義の研究』(一九六八年、永田文昌堂、一七四頁)
- 25 村上速水、前掲書、一七六―一七七頁

26 大江淳誠は、親鸞が『教行信証』信巻末に『涅槃經』を挙げて罪業無自性を示すことを指摘する。（『教行信証と仏教思想』二八頁）

27 大江淳誠は、罪業無自性の義は衆生の体の無自性をあらわすのであって、「真仏土巻」にも『涅槃經』を引用してこの意を示している、と指摘する。

（同『教行信証と仏教思想』二九頁）

28 大江淳誠は、この文の意について「煩惱の外に仏性が存在することをいうものではなく、煩惱それ自体の無自性の義をいう」と指摘する。（『教行信証と仏教思想』一六二頁）

29 池本重臣は自力と他力の思想について、「自力法とは、因果の法則・業思想・差別の論理によって成り立っているのである。それに対して弥陀法は第十八願に示されるように、平等の論理によって成り立っているのである」「自力法は人間の論理、差別の論理、相対の論理の上に成り立っているものであり、それに対して、他力法は仏の論理、平等の論理、絶対の論理の上に成り立っているものである。それではこの仏の論理、平等の論理は仏教ではどのように説いているのであろうか。これは縁起説として説かれているのである。」と述べている。（池本重臣『親鸞教学の教理史的研究』三六四、三六五頁）

30 大江淳誠は、親鸞が『教行信証』信巻末に、『論註』八番問答のなかの第六問答において滅罪の義を論ずる根拠は、空の義であり、罪業の体自性なきが故に、真実法の力用よくこれを破することを示すと指摘する。（同『教行信証と仏教思想』二九頁）

31 親鸞は浄土に生ずることの「生」について、『論註』を引用し「無生の生」であるとしている。（『教行信証』「行巻」大行釈・『論註』引文、一五七―一五八頁）

32 大江淳誠は、親鸞が「罪業もとりかたちなし」といえるのは明らかに無自性空無所有の義においてこれをいうものであることは明らかであると指摘する。そのうえで空無所有、無自性でなければ他力回向の義の根拠を失い、転成することができない。転悪成善は廻向の意義であり、仏の真実功德の力がよく衆生の造悪に入り、融摂せしむるという義である、と述べる。（同『教行信証と仏教思想』七三頁）

33 小妻道生は、「煩惱成就」の言葉は、「信心開発」（念仏正信偈）、「弥陀の弘誓」、「他力の信」（高僧和讃）と呼応しあう積極的な意義を持つが、「煩惱を具足する」というとき、それに呼応する言葉がおかれていないことを指摘する。（小妻前掲論文）

34 例えば「方便化身土巻」には、「汝是凡夫心想羸劣」といへり、すなはちこれ悪人往生の機たることを彰すなり。（『観経隠顕』三八二頁）、「草提はすなはちこれ女人の相、貪瞋具足の凡夫の位なり」（『観経隠顕』三九一頁）、「いはゆる凡夫・人・天の諸善、人・天の果報、もしは因、もしは果、みなこれ顛倒す、みなこれ虚偽なり。」（『観経隠顕』三九一頁）、「もろもろの凡夫の病を知るに三種あり。一つには貪欲、二つには瞋恚、三つには愚痴なり。」（真門釈・四〇九頁）、「当今の凡夫は現に信想軽毛と名づく、また仮名といへり、また不定聚と名づく、また外の凡夫と名づく。いまだ火宅を出でず。」（『聖道釈』二門通塞・四一五頁）とある。

35 凡夫における因果の実体視は親鸞にいう「信罪福心」ともいえよう。例えば梯實圓は、「罪福を信ずるとは、善因果果、悪因果果と云う因果応報の道理、廢悪修善の道理だけを信じて仏智不思議の本願を信じない者をいうのである」（同『顕浄土方便化身土文類講讃』永田文昌堂、二〇一〇年、三八頁）と述べている。

36 渡邊了生は、親鸞のいう「（義）なきを義とす」とは、「信罪福心による実体的業報思想へのとらわれ」自力の執心「自力のひとはからひ」であるところの「（義）」、その「（義）なき（否定・超克）を「義とす」（『他力の道理・法則の信知』）と了解されるべきであろうと指摘している。（同『親鸞が語る「自力」概念の基底とは―「信罪福心」、ケネスタナカ編『智慧の潮、親鸞の智慧・主体性・社会性』武蔵野大学出版会、二〇一七年）

37 小妻道生は、機の深信と法の深信とは一つのことであることと同様に、「煩惱成就せるありて」ということと「浄土に生るること」とは、一つのことであると述べる。そして、煩惱が煩惱としてあるだけでは、「浄土に生るる」ということはありえない。煩惱が煩惱として十分にその目的を果すときに、浄土に生ることが可能となる。煩惱の使命は、それぞれの人を浄土に送るところにあ

り、煩惱が導火線となって人をして浄土に目を開かせたとき、その煩惱が煩惱としての使命を全うしたといえる。従って「凡夫人の煩惱成就せるありて」ということと「浄土に生るることを得る」ことは、一つのことである、と指摘する。(小妻前掲論文)

38 「しかるに薄地の凡夫、底下の群生、淨信獲がたく極果証しがたし。」

(『浄土文類聚鈔』三法列釈・四八〇頁)、「凡夫」はすなはちわれらなり、本願力を信樂するをむねとすべしとなり」(『一念多念文意』六九二頁)、「凡夫なればとて、なにごともおもふさまならば、ぬすみをし、人もころしなどすべきは。」(『御消息』八〇〇頁)等。

39 『御消息』「信心をえたるひとは、かならず正定聚の位に住するがゆゑに等正覚の位と申すなり。」(『註釈版聖典』七五八頁)

40 「信巻」「まことに知んぬ、弥勒大士は等覚の金剛心を窮むるがゆゑに、竜華三会の暁、まさに無上覚位を極むべし。念仏の衆生は横超の金剛心を窮むるがゆゑに、臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す。ゆゑに便同といふなり。」(同右二六四頁)

41 「信巻」『華嚴經』(入法界品・晋訳)にのたまはく、「この法を聞きて信心を歡喜して、疑なきものはすみやかに無上道を成らん。もろもろの如来と等し」となり。」(同右二二七頁)、『浄土和讃』「信心よろこぶそのひとを如来とひとしときたまふ。大信心は仏性なり。仏性すなはち如来なり」(同右五七三頁)、『御消息』「まことの信心あるひとは、等正覚の弥勒とひとしければ、如来とひとしとも、諸仏のほめさせたまひたりとこそ、きこえて候へ。」(同右七七六頁)

42 「答へていはく、いまし衆生障重くして、境は細なり心は粗なり。識颯り、神飛びて、觀成就しがたきによりてなり。」(『教行信証』「行巻」大行釈・一六四頁)、「このゆゑに名づけて信不具足とす。この人、不具足信を成就すと。」(『教行信証』「化身土巻」真門釈・四〇七頁)

43 「菩薩は第五門に出でて回向利益他の行成就したまへりと、知るべし。」「菩薩はかくのごとく五門の行を修して自利利他してすみやかに阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得たまへるがゆゑに」と。(『行巻』大行釈・一五四

頁)、「このゆゑに如来、一切苦惱の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、乃至一念一刹那も、回向心を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに、利他真実の欲生心をもつて諸有海に回施したまへり。」(信巻・法義釈・二四一頁)、「それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまへるところにあらざることあることなし。」(証巻・四法結釈・三二二頁)等。

44 小妻道生は、親鸞の意図する「成就」は、達成する、完成する、十分に果たされるという意味が中心であり、その「成就」の主体が、願成就、金剛心成就、回向成就、大悲心成就など、成就されるべき内容にふさわしいものであることなどから考えて、親鸞における「——成就」という語は、その語自体の中に、すでに証の内面を表示する意義をもっていたのではないか。またそのことは、「——成就」の語が、証巻にきわだて多く使われている事実からも証明されると指摘する。(小妻前掲論文)

45 大江淳誠は、親鸞の「一乗海釈」及び『高僧和讃』などに氷水の喩をもって煩惱即菩提の義を示すものは、体一なりとするのであって、罪惡の無自性をあらわすのである。罪惡無自性なるが故に願力よく転ぜしむることを得る、と述べている。(同『真宗の本願論』一六〇頁)

46 小妻道生は、親鸞においては、「煩惱具足」と「煩惱成就」とは異なった意義を持つていたと思わざるを得ない。「煩惱具足」は、苦惱の真只中の言葉であり、それを通りぬけて、明の世界にぬけ出た言葉が「煩惱成就」という言葉だと思ふ。即ち「煩惱成就」は、証の内面を表示するにふさわしい言葉としての意義を持つと指摘する。(小妻前掲論文)

47 「諸法は因縁生のゆゑに、すなはちこれ不生にして、所有なきこと虚空のごとし」(『行巻』大行釈・一五七頁)、「一切の法はみなこれ化なり。この法のなかにおいて(中略)諸仏の法の変化あり、煩惱の法の変化あり、業因縁の法の変化あり。」(『真仏土巻』真仏土釈・三六六頁)、「往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども、一人にてもかなひぬべき業縁なきによりて、害せざるなり。」(『歎異抄』八四三頁)、「さるべき

業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」とこそ、聖人（親鸞）は仰せ候ひしに」（同八四四頁）

48 「煩は身をわづらはす、悩はこころをなやますといふ。」（『唯信鈔文意』七〇八頁）、「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、（中略）臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと」（『一念多念文意』六九三頁）

49 大江淳誠は、「諸法無自性空の義を根底に有する以上、その転成を限って涅槃の果智とのみすべきではない。現生の有漏心の上にも語り得るのである。而して常に個人的性格にのみ限らず、ひろくこれを社会の複合体の上にも語り得るのである。斯の如く現世を穢悪濁世と談じ、人間を無有出離之縁となすものは、現世の真相人間の性得を顕わして、もってその所謂他法成立の因由を示すのであるが、同時にその濁悪相を語ってこれを示すところに却って倫理的規範の必要を表わすのである。而してその規範はもって彼岸の理想とする涅槃の無我に順じ、これを凡夫有漏心に相応して示し、これを倫理的無我とし、個人および社会の生活に現出せしめんとするもの、これが親鸞聖人の教学に含む現世における倫理的価値とするのである」と述べている。（同『教行信証と仏教思想』一〇八〜一〇九頁）

50 『御消息』には「もとは無明の酒に酔ひて、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒をのみ好みめしあうて候ひつるに、仏のちかひをききはじめしより、無明の酔ひもやうやうすこしづつさめ、三毒をもすこしづつ好まずして、阿弥陀仏の薬をつねに好みめす身となりておはしましあうて候ふぞかし。（中略）薬あり、毒を好めと候ふらんことは、あるべくも候はずとぞおぼえ候ふ。」（七三九頁）とある。

51 前註一